

2008年1月30日

卒業論文

いち  
—アメリカ人兵士のベトナム戦争

—Bruce Anello(1947/8/24～1968/5/31)の日記が伝えるもの—

敬愛大学 国際学部 国際協力量科

学籍番号: 047177

氏名 : PHAM DUC QUANG

いち  
—アメリカ人兵士のベトナム戦争  
—Bruce Anello(1947/8/24～1968/5/31)の日記が伝えるもの—

序章		1
第1章	戦争に対する兵士の認識	2
第1節	戦争の意義のあいまいさ	3
第2節	戦場の兵士は現状を理解していたのか	3
第2章	戦争状況と自然環境	5
第1節	ゲリラ戦の中の兵士	6
第2節	戦争激化の中の兵士	7
第3節	自然の中の兵士	8
第3章	軍隊と政府と兵士自身	10
第1節	軍隊の中の兵士	10
第2節	兵士対上官	11
第3節	兵士対政府	14
第4節	兵士の自己意識	16
終章		17

## 序章

ベトナム戦争は、ベトナムの独立と南北統一をめぐり、「南ベトナム解放民族戦線<sup>(1)</sup>とこれを支持する北ベトナム政府」対「南ベトナム政府とこれを支持するアメリカ」の戦いであった。この戦争はアメリカにとって史上最も長い戦争であり、しかも初めて負けた戦争であった。小国であるベトナムに負けたことは超大国であるアメリカの威信と名誉を大きく傷つけ、その敗戦原因がずっと議論された。主観的及び客観的にいろいろな原因が挙げられてきたが、私はアメリカ自身の問題であるアメリカ軍兵士に注目する。戦争中、兵士たちの間では自殺をしたり脱走をしたり反対行動を起こしたりするほど士気の低下した者や戦う勇気を失った者が後を絶たなかった。そのベトナム戦争の中で、なぜアメリカ軍兵士は士気を保てず戦う勇気まで失うという深刻な精神状態に陥ったのか、これを明らかにするのが本論文の目的である。

私は、論証するにあたり、次の3つの論点から考えていきたい。1つ目は、ベトナム戦争自体に対するアメリカ軍兵士の認識のことである。ここでは兵士が戦争の意義をどのようにとらえ、またどのように理解していたのかを分析する。2つ目に、ベトナム戦争の戦争状況と自然環境を取り上げるつもりである。ゲリラ戦、戦争の激化、厳しい自然環境といった状況の中で戦った兵士の精神状態を見ていく。3つ目は、兵士の軍隊の中の存在、上官との関係、政府との関係、そして自分自身に対する自己意識というものに注目したいと思う。

先行研究には、市川ひろみ著『傷つく兵士—戦場の被害者—』（神戸大学大学院法学研究科、2005年）がある。これは、戦場の一個人としての兵士（アメリカ軍とイスラエル軍兵士）に注目して研究している。各戦争の実態の事例が取り上げられ、兵士における加害者としての苦しみ、直接的な精神的被害と「心的外傷後ストレス障害（PTDS）」の長期的な精神的被害のことについて書かれている。そして、戦場における兵士は加害者でありながら被害者でもあるということを明らかにした。筆者自身が戦争の現実による「殺されても仕方がない」立場に置かれた兵士の存在を訴えていることから、この論文は、私たちに、いつの間にか当然となってしまっている現実の不条理についてもう一度考えさせるものとなっている<sup>(2)</sup>。

本研究においては資料として、Huu Ngoc 著 *A File on American Culture* (The gioi, 1995)の中にベトナム語翻訳で収められた“Diary of a G.I. Who Fell in the Vietnam War”を用いた。これは、1967年10月末に南ベトナムに送られ、1968年5月31日の攻撃中に死亡した Bruce Anello(1947年8月24日生まれ)<sup>(3)</sup>という当時20歳のアメリカ陸軍兵士が南ベトナム戦場で書いた日記である。一兵士の目を通して記録された重要な証言となっている。彼の詳細な描写力はベトナム戦争の現実を伝える貴重な資料であると私は考え、これを扱うことにした。実際に参戦した一人の兵士の手記を読む(兵士の声を聞く)ことによって、多くの兵士たちの精神状態をより深く理解することができると思う。他に、亀山旭著『ベトナム戦争』（岩波新書、1972年）、清水知久著『ベトナム戦争の時代』（有斐閣、1985年）、マイラ・マクファーソン著松尾弑之訳『ロング・タイム・パッシング—ベトナムを越えて生きる人々—』（地湧社、1990年）及び吉田元夫著『歴史としてのベトナム戦争』（大月書店、1991年）も参考にした。

## 第1章 戦争に対する兵士の認識

1954年、フランスに対するベトナムの勝利はアジアだけでなく全世界へ影響し、世界各地の植民地で民族解放運動に携わる人々に希望を与えた。そこで、共産主義の膨張を恐れたアメリカは世界に対して、民主主義と自由世界を共産主義から守る責任が自分にあると主張し、これを果たすためにベトナムで軍事戦略を実行した。1954年から1965年の間、アメリカは南ベトナム政府に資金援助をしたり軍事顧問を派遣したりするなど徹底的に支援したが、あまり効果がなかった。1965年から1973年までの8年間は、アメリカ軍の戦闘部隊がベトナム戦場へ送られ、直接に参戦していた期間となった。南ベトナム戦場におけるアメリカ軍の兵力が年々増強されていくにつれ、戦死した兵士の数も急速に増えたことが以下の表から読み取れる。8年間で、アメリカ軍兵士の数は7倍近くになり、また死亡人数は114倍以上も増えたことがわかる。

	南ベトナムのアメリカ軍兵力(人)	アメリカ軍戦死者総数(人)
1965年7月	81,400	509
1965年12月	184,300	1,594
1967年12月	485,600	15,979
1973年1月	543,400 (1969年4月以来)	58,191

(4)

本章においては、兵士が戦争の意義をどのように考え、理解していたのかを見ていきたいと思う。

## 第1節 戦争の意義のあいまいさ

ベトナムでは、アメリカ合衆国は「アメリカ帝国」と呼ばれ、ベトナム戦争は「抗米救国戦争」と呼ばれていた。文字どおり、祖国を救うために帝国主義のアメリカに対抗し戦った戦争である。ベトナム側から見ると、この戦争は、封建時代に中国に対抗し、植民地時代にフランスと戦った過去の戦争と同様に、外国からの侵略に対して自分たちの国を守るための正義の戦争であった。ベトナム民族は自分たちの存在と自分たちが住んでいる領土の確保を長い歴史の中でずっと維持し続け、かつて最強といわれたあのモンゴル帝国に勝利した民族としての誇りを持つ。同化と侵略に対してあきらめることなく勝利と自由が手に入るまで徹底的に戦い続けてきた。1954年、共産主義者の指導の下で自国の腐敗した封建制度から解放されたベトナム国民は一致団結でフランスに勝利し、社会主義国の建設に力を入れた。ベトナム人は社会主義に満足し、「独立-自由-幸福の共産主義」という目標に向けて日々努力を重ねていた。

このような国に、そして民族に、強大な軍事力を持つ超大国アメリカは宣戦もせず攻撃しにやってきて、生活がまだ困難であった北ベトナムの人々の頭に爆弾を落とし、南ベトナム政府を自分の好きにコントロールしようとした。これが、ベトナム側から見たアメリカの姿であった。共産主義からベトナム人を救いに来たという宣伝文句は、共産主義を目標としてがんばって生きているベトナム人にとって意味がなかったし、これは明らかに侵略行為であった。アメリカの戦争指導者たちの挙げた理論や理由が何であれ、アメリカ人を含む全世界の人々にとってこの戦争は意味のはっきりしない戦争であった。当時アメリカ国内で、そして世界各地で起きた「ベトナム戦争反対運動」がこのことをはっきりと示していた。

果たしてのこういった状況の中、戦地に送られたアメリカ軍の兵士たちは戦争をどのように理解していたのだろうか。その認識が彼らの精神状態にどう影響したのかということを見ていきたいと思う。

## 第2節 戦場の兵士は現状を理解していたのか

「なぜおれたちはここにいる。その疑問がいつも頭の中にある。」(1967年10月28日)

1967年10月16日、San Francisco 湾から出発し、南ベトナム戦場に着いた Bruce Anello (以下、Bruce という) が最初に書いたのはこの記述である。20歳の青年はまだ自分たちのこの地における存在の意味が理解できていなかった。先のことに対して彼は不安を感じていた。なぜ自分たちがここにいるのかという疑問は不安とともに彼の頭から消えることはなかった。

それから2ヶ月ほどが経った頃、戦闘なども経験したところで、またも疑問が生まれてきた。1967年

12月21日の日記には、「おれたちはここで何をしてるのか」と書かれていた。自分たちの存在意義のみならず、今度はさらに自分たちの行動と役割まで疑い始めたのであった。朝 Bruce のパトロール隊はある村に入り、前の晩そこに南ベトナム解放民族戦線(以下、解放戦線という)がいたことを知り、民家を燃やした。民間人を守るのかどうするのか。守るのであれば、なぜ彼らの家を燃やしたのか。この状況の中で農民は解放戦線の人たちについて行けばいいのか、それともアメリカ軍の自分たちについて行けばいいのか。こういった疑問が彼の頭を占めた。そしてこのような矛盾した行動が続いたことで、戦場の兵士たちはさらなる疑いを抱くことになった。「その町を救うためにそれを破壊する」とは、あるアメリカ軍士官の発言であった。この言葉はアメリカのメディアで伝えられ、ベトナムにおけるアメリカの戦争政策と戦争努力の矛盾を象徴するものとなった。「その町」を自分の仲間であると考え、仲間を救うために結局仲間を殺すのであれば、いったいこの戦争はアメリカ人にとって何の意味があるのか。そしてこの戦争自体は何か。このような状況は、ベトナムで戦うアメリカ軍兵士だけでなく世界各地の人々にも疑問をもたらすこととなった<sup>(5)</sup>。

「敵」であるベトナム側の兵士たちの精神力が強いと Bruce は言っていた。なぜなら、自分の国の独立と自由を守るために戦っているという明確な目的があったからということも彼にはわかっていた。「ここは彼らの国だからこそ、自らの国のために犠牲になる」(1968年2月12日)。それと比べて、アメリカ軍兵士が戦う目的はない。このようなことは、戦場の兵士にとって最もつらいことであると思う。Bruce もこのベトナムという国を奪いたくなかった。それなのに、「勝つためのものがない」戦争を戦い続けなければならなかった。「勝つためのものがないのに何に対して勝つっていうんだ」と彼は叫んでいた。戦地に赴くということは、死に向き合うことである。しかし、目的のない戦いのために自分はこのまま死んでいいのか。自分の命を無駄にしているのか。こういった疑問がアメリカ人兵士の戦う勇気に影響を及ぼすことになったと考えられる。

「もう5ヶ月もここにいて、何のために戦ってるのか、まったくわかんない。」(1968年3月20日)

Bruce は自分の書いた日記を読んでも、そしてこの地での怖い経験を振り返ってもベトナム戦争に対する疑問に結論が出ないと言っていた。5ヶ月というベトナムでの義務期間<sup>(6)</sup>の半分近くが過ぎたにもかかわらず、理由(なぜ戦う)や目的(何のために戦う)といった戦争の意義を悟らないまま、あるいは疑問を持ったまま戦場で戦い続けなければならない兵士がいたのであった。領地を増やしたわけでもなく奪還したわけでもないのなら、いったい自分がここで何をしているのだろうとあるアメリカ軍兵士はベトナムで叫んでいたという<sup>(7)</sup>。また、マレー・ポルナー氏が戦争中に200人以上の帰還兵を対象に行ったインタビューによると、「すべての者が戦争の意味、そしてアメリカの役割について疑問を持っていたことが判明した」のであった<sup>(8)</sup>。

1968年3月18日、「Search and Destroy 作戦」に参加していた Bruce は搜索と破壊を繰り返すうちに、どちらにしても自分が現地の人に嫌われるだけという現実気づいた。自分の努力の結果から得たものは、現地の人々の冷たい態度であった。自分たちがベトナム人を救いに来たのになぜベトナム人に嫌われ、敵視されるのだろうと思う兵士もいた。しかし、「共産主義者と民族のための正義の戦い」を支持したベトナム人の目には彼らが自由と幸せを奪いに来ている侵略者である存在としか映っていなかった。1965年8月からアメリカ軍は次々と作戦を展開していき、1966年に本格的な Search and

Destroy 作戦が始まった<sup>(9)</sup>。この作戦の本来の目的は敵を捜し出して殺すのであるが、敵でない民間人まで巻き込む悲惨な結末を引き起こす実に残酷な作戦でもあった。1968年3月16日の朝、ある恐ろしい事件が起きた。アメリカ軍は Quang Ngai 省の Son My 村 My Lai 部落を襲撃しにやってきて、女性と子供も含む非武装のベトナム民間人数百人を殺したという事件であった。当初、この事件は単なる解放戦線の部隊との戦いであると発表されたが、その1年9ヵ月後の1969年12月にアメリカの「ニューヨーカー」誌が報道し、「ソンミ村虐殺事件」(あるいは「ミライ虐殺事件」)として広く知られるようになった。この大虐殺事件はアメリカ軍の歴史に残る汚点となり、アメリカに対する世界各地の批判と反戦運動が強まることとなった<sup>(10)</sup>。さらに、アメリカ軍兵士がますますベトナム人に嫌われるようになった原因の一つでもある。

ベトナムで戦っていた兵士には、本当のことは何か、そしてどうすればいいのかを、まったくわからないまま戦い続けていた者がいた。戦争の意義など関係なく、もうここに送られたから、ここですでに戦っていたから、このまま戦い続け、期間が終わるまでただ待っていただけの者もいた。どちらにしてもアメリカ軍兵士のベトナム戦争に対する認識は不十分で、あいまいなものであった。このことは彼らの精神に影響し、危険な状態に追い詰めることとなったと考えられる。

Bruce 自身は戦場に出るとき、頭を低く伏せ、片足を挙げることを経験で学んだ。1回負傷すると2週間の休みが取れ、そして2つの「パープルハート」<sup>(11)</sup>がもらえたら永遠に戦場から離れられるという。1968年3月21日、日記には「これは怖いやり方だけど、最近の戦闘で拳がった手や足が多く見えた」と書かれた。兵士たちは戦いたくない、戦闘が怖い、戦場から離れたいという気持ちであった。彼らが取った行動は、敵からの銃弾が当たっても死亡に至らず負傷だけで済むように戦闘中、手や足を挙げることであった。なぜなら、3回負傷したらすぐに帰国できるという軍隊の規定があったことを彼らは知っていたからである。しかしなんとと言っても、これは危険であった。それにもかかわらず、戦闘で拳がった手や足が多く見られた。戦場の兵士の追い詰められた精神状態が伺える。しかし、戦場に出たことのない後方の基地の兵士の方がより退屈で絶望的だろうと Bruce は書いた。1968年3月21日の日記には、一人の兵士が45口径(12ミリ相当)の銃で自分の頭を撃ったという記述がある。もはや逃げ道がないと知り、自分の体を傷つけたり、自殺まで試みたりするほどこの戦場から離れたいという気持ちを持つ兵士たちがいた。

戦争の意義もわからず戦い続けなければならなかった状況の中でアメリカ軍兵士は自分たちの存在を疑い、行動と役割を疑い、そして戦争自体を疑うようになったのは事実であった。疑問を持たずにベトナムに送られた兵士たちでも戦争を続けるうちに、自分のさまざまな体験からベトナム戦争の意味を考えるようになったという<sup>(12)</sup>。徐々に不安と疑惑が増し、彼らの士気が低下し、戦う勇気がなくなっていったと考えられる。

## 第2章 戦争状況と自然環境

本章では、ベトナム戦争の南ベトナム戦場における実際の戦争状況と南ベトナムの自然環境を取り上げる。前章で述べた戦争に対する兵士の認識という兵士自身の主体的な問題と違って、当時の状

況や兵士の周りの環境がもたらした客体的な問題に注目する。世界最強といわれる軍隊の中で訓練され、最新の兵器を使っていたアメリカ軍兵士でもベトナム戦争を苦戦した。前章の中で挙げた統計表を見てわかる通り、戦死した兵士の数は年々増し、最終的に派遣兵数全体の10%以上にも上った。特に1965年12月から1967年12月までの2年間は、アメリカ軍兵力は2.6倍増え、戦死者総数は10倍以上にもなった。果たして兵士たちはどのような自然環境の中に置かれ、どのような戦争状況の中で戦っていたのか。また、そのような環境や状況は彼らにどう影響していたのか。こういったことに基づいて、戦場におけるアメリカ軍兵士の精神状態をさらに見ていきたいと思う。

## 第1節 ゲリラ戦の中の兵士

ベトナム戦争は、アメリカ側の大規模な重武装の軍隊に対して、ベトナム側の小規模で軽武装の勢力とゲリラ戦が特徴的であった。超大国アメリカの巨大な軍事力と戦うことにゲリラ戦が必要であるとされていた。前線がはっきりしない、解放戦線が軍服を身につけず民間人と一体化し、ゲリラによる小規模の攻撃の速さ、撤退の速さ、などという特徴でアメリカの主な正規軍と大きく異なっていた。戦線は不明確で、北ベトナム軍との戦いであると同時に、激しいゲリラ戦でもあり、前線における作戦行動といった通常の形式での戦闘はほとんどなかったという<sup>(13)</sup>。

敵である解放戦線の主力部隊を発見するために、アメリカ軍はパトロールをしなければならなかった。歩兵全体が少人数のチーム(パトロール隊)に分けられ、農村や山丘、ジャングルの中をずっと歩き続けさせられていた。集団で移動すればするほど、現地の長い経験を持つゲリラたちが仕掛けたわなや地雷に引っかかる危機が増えた。「一同の恐怖は極限に達していた。一歩進むたびに爆音や苦痛の叫びが起こるのではないかと身構えた。500ヤード進むのに4時間かかった」とアメリカ軍帰還兵トムは回想している<sup>(14)</sup>。それに、兵士各自の必需品である銃、弾薬、水、食料、殺虫剤、救急道具、寝具、鉄帽子、防弾着などを全部背負ったり身に付けたりし、いっしょに持っていかなければならなかったことで、戦うどころか体を動かすだけでも大変で、そして歩くスピードもどんどん落ちていった。それに対して、ゲリラは銃や手榴弾しか持っていなかったため、すばやく移動しすばやく攻撃できたのであった。

1967年11月18日、Bruceのチームは一日中、山に登り丘に登り、歩いて何かを捜していた。しかし何を捜しているのかがわからなかったという。やはり行動の目的がなかった。長い時間ずっと歩き続けても敵が誰一人見つからない状況になると、疲労感と退屈感が生まれるのだろう。この日のパトロール中、警戒しながら周りを見るのではなく下を向いて自分の足だけを見ていることにBruceは気付いた。チームで行動していても少人数であったため、ゲリラ戦の中の戦いは常に一人の戦いと言っても過言ではない。つまりこれは、アメリカ人兵士一人ひとりの孤独な戦闘でもあった。見ず知らずの環境の中で敵との戦いはとにかく、自分自身の孤独感とも戦わなければならなかった。さらにアメリカ軍兵士にとってゲリラ戦の中で一番危険なのは、ゲリラという姿の見えない敵による攻撃、狙い撃ちであった。

「いつまで続くのか。見えない敵と戦えない。なのに、練習場での訓練みたいに歩いている。『いつ見つかる?』って聞いたら、『自分が撃たれるときだ!』って答えられる・・・」(1967年12月6日)

Bruceたちは、目に見えない敵といつまでも続く終わりのない戦いの中でひたすら歩いていただけであった。その姿の見えない敵が見つかる瞬間という、自分たちが撃たれるときだけであると教わった。

こういふときはつまり、敵を見つけると同時に兵士も負傷したり死亡したりする可能性に直面するということを意味していた。この場合、軍隊でいくら訓練され、いくら知識を得たとしても、見えない敵に一瞬のうち殺される兵士にとって、その訓練や知識の意味はなかった。いつ殺されるのかもわからない、いつ殺されてもおかしくないという状況の中に置かれた兵士は恐怖心を抱き、英雄的な死でもなく不条理な突然の死に直面した<sup>(15)</sup>。このように、肉体も精神も疲れていたパトロール中の兵士は、突然の攻撃に対して適切な反応を取れず、まったくの受け身の存在になっていたのであった。

過酷なゲリラ戦の中で戦うアメリカ軍兵士には、敵の姿が見えないだけでなく、誰が敵なのかもわからないということがあった。昼間の民間人が夜のゲリラになったり、行きつけの店の店員が解放戦線の支持者であつたりした。戦地の兵士はベトナム人市民を誰一人信用できず、人間不信にもなっていた<sup>(16)</sup>。パトロールで村に入ってもその村人の中に誰が解放戦線なのかがわからないことから、村ごとを破壊し、非戦闘員の民間人を含む村人を全員殺すという無差別残虐行為を引き起こす原因となった。それに、先の見えない戦況は容赦ない暴力を誘発し、その過剰な暴力は士気を低下させ、さらなる残虐行為につながっていったということも考えられる<sup>(17)</sup>。

## 第2節 戦争激化の中の兵士

言うまでもなく、戦場の兵士は激しい戦闘によって身体だけでなく精神にも衝撃の被害を受ける存在である。ベトナム戦争で戦争の激化とともに、強化された正規軍による攻撃や砲撃だけでなくゲリラによる狙撃も前より頻繁に起こり、アメリカ軍兵士に襲いかかった。

1967年12月8日の日記に、Bruce たちがパトロール中に攻撃されたことが書かれていた。Bruce 自身は幽霊のように、もはや悪夢と現実を区別できないような存在になっていた。しかし、彼の肘までの泥も、腰の痛みも、足の傷も、顔に付いている土も、目に映っている光景も「本当」であった。それに、激しい雨も、爆発も、人が倒れているのも、血が流れているのも「本当」であった。周辺に起こっている生々しくひどい光景を彼ははっきりと意識した。激しい雨の中の激しい攻撃の中、彼自身が負傷し疲れきっていた。周りに仲間なのか敵なのかわからない人々が倒れたり、血を流したりしていた。この日記には「本当」という言葉が何回も繰り返され、すべてが残酷な事実であったことが強調され、読者にもそのときの雰囲気があるまま伝わってくる。目に見え、肌で感じ、神経が刺激されたこのような恐ろしい体験は Bruce という一人の兵士である前に、一人の人間、しかもまだ20歳の青年にとって大きな打撃であった。感覚も神経も働かなくなり、「眠るのが怖い」という不安定な精神状態にまでなっていた。

1968年2月10日、さらに激化した戦闘は戦場を地獄化した。その中で戦う兵士に、これが本当の自分の姿だろうか、冷酷と恐怖をもたらすこのような場所がほかに世界のどこに存在するのだろうかと思わせた。Bruce は自分たち兵士を「破壊の嵐に巻き込まれたバカな連中」と呼んだ。目的もないのに、なぜ自分たちがこの恐ろしい体験をしなければならないのかと思った。それだけでなく、現場で戦死した仲間も敵も含めた人間の悲惨な姿を目撃したことが生き残った兵士にとって、「心の深い傷跡」となり、彼らの脳裏にずっと残り続けるものとなった。戦闘の経験を持った兵士だけでなく、死者を数えるという仕事を任せられた兵士は一回も銃を撃ったことがないにもかかわらず、その悪夢のような任務で深く傷ついた者もいるという<sup>(18)</sup>。長時間の戦闘の中で試された兵士の体力も精神力も限界に達したかのよう



に、自分自身の考えも行動もコントロールできなくなった。自分の中の悪魔が現れ狂気を強めて、「理由もないのに人を殺しまくる」という悲惨な無差別残虐行為を引き起こす者もいた。1968年2月26日の日記の中で、Bruce はそれを「平和のためではなく裏切り行為だ」と書いた。彼の体はすでに弱っていて、周りが見えなくなった。一日が長く感じられる血に染まった過酷な戦場では、「真理も正義もなくなった」と彼は日記に訴えた。

「昨夜、砲撃された。当たらないように祈ってただけ。ほかに何もできなかった。」(1968年4月11日)

強化された北ベトナム正規軍の砲撃に対してまったく反攻も何にもできなかったという無力さを感じた兵士たちはただ神様に祈るしかできなかった。さらにその約3週間後の1968年5月4日に、Bruce たちはまた砲撃され、「ここで鉄の神経も負ける」と思った。それほどベトナム戦争はアメリカ軍兵士にとって、極めて厳しい戦争であった。それほどアメリカ軍兵士の生命と精神は、苦しい状況の中に置かれていた。その攻撃で Bruce の仲間は何人が負傷したという。その中に、もう少しでアメリカに帰国できる兵士はなぜか一番ひどく負傷し、命も危なかった。この恐ろしい現実には戦場の兵士をさらに悩ますことになり、彼らの士気を低下させ、戦う勇気を失わせる原因になった。

戦争のとき、後方の基地が最も安全な場所であると思って1968年5月6日に戻ってきた Bruce はさらなる衝撃に直面した。「後方も砲撃された。この10ヶ月で初めての砲撃だった」という事実である。結局、この地で自分たちの隠れ場や逃げ場はもう存在していないのではないかと兵士たちも思っていたのだろう。ベトナム戦場には絶対的に安全な場所はもはやなく、そのために戦闘恐怖症になってしまう兵士が続出したという<sup>(19)</sup>。

### 第3節 自然の中の兵士

南ベトナム戦場でアメリカ軍兵士は姿の見えない人間という敵と戦いながら、自然という敵とも常に戦わなければならない状況に置かれていた。南ベトナムの気候は北ベトナムの四季と違って、乾季と雨季しかなく、それにジャングルや山丘が多い。雨季では、突然の大型集中豪雨が襲うことも珍しくない。さらに雨季が終わると、蚊の群れはどんどんやってきて、マラリアなど病気のもととなる。そのため、アメリカ軍兵士各自の必需品の中には殺虫剤が必ず入っていた。1967年11月4日の夜、疲れたのに眠れなかった Bruce は一晩で数千匹という蚊を殺した後、「この成績で勲章を受け取るのも当然だろう」と日記に書いた。

「待ち伏せ。雨が鉄帽をたたく。雨水が首回りまで流れて全身を濡らした。引き金につけてる指が冷たい風と恐怖で固まってる……一発も撃ってない。誰も見てない。退屈と疲労だけだ。」(1967年11月9日)

第1節でも述べたように、敵を発見するためにアメリカ軍はパトロールをしなければならなかった。農村、山丘、ジャングルといったさまざまな環境の中で、ジャングルが一番危険な場所であった。Bruce が参戦した10月は、南ベトナムが雨季に入る時期である。半年くらいの間、冷たい雨が何日もずっと降り続くことがある。ジャングルの中は常にじめじめして寒いため、雨で全身が濡れた彼はもっと寒く感じていたのだろう。寒さと恐怖感に耐えながら、敵誰一人見えない状況の中でただじっと待ち伏せをしていただけであった。

1967年12月10日の夜、嵐の中、前日仲間の一人が死んだ場所で、10時間以上のパトロールと伏

兵が行われた。Bruce は自分にも同じようなことが起きるのではないかと不安でいっぱいであった。真っ暗な雲、激しい雨、冷たい風、うっそうとした木々に対する恐怖感は強いはずの兵士を弱い人間に変えていった。十分な食事を取れなかったことによる空腹に耐えながら、狭い空間の中に長時間置かれ、Bruce は全くの無力感を覚えた。さらに、ジャングルの中でのパトロール中、毒蛇や野獣に襲われる危険性は十分にある。このような環境を経験したことのないアメリカ人兵士は当然ながら不安でいっぱいだったはずである。しかし、それよりも怖いのは、ジャングルの自然を利用し、突然兵士たちに攻撃しかけてくるゲリラの方であった。1968年3月5日、Bruce は共にジャングルに入った新兵に「動物による音は問題ないけど、自分に向かって撃ってきたらそれは動物じゃないはず」と彼自身の経験を教えている。

「目まで汗が流れてる。泥水の中で待ち伏せ。足に蟻。耳に蚊。真っ暗な空。怪異な形に化した木々。風で枝が揺れただけで怖い……」(1968年4月24日)

今度の伏兵は4月、暑い時期になった。ジャングルの中でいつも湿度が高いため、実際以上に蒸し暑く感じる。それに、昆虫に悩まされながら恐怖感とともに長時間にわたる泥水の中で待ち伏せをしていた Bruce の体力はどんどん消耗されていった。慣れない厳しい気候と自然環境はその中で戦う兵士の体力を奪い、神経に緊迫感を与え、さらなる精神的なダメージをもたらしたと考えられる。ジャングルの中はまるで温室の中のような暑さで、アメリカ軍の兵士たちは汗と血で体中が重苦しかった。それとは反対に、解放戦線のゲリラが夜に目隠しをしても歩き回れるほどジャングルを知り尽くしているのは確かであったという<sup>(20)</sup>。

南ベトナムの自然の中でゲリラ戦が展開されたことによって、世界最強の軍隊といわれるアメリカ軍の強力な兵器はその優越性をあまり発揮できず、人間であるアメリカ軍兵士は重い負担をかけられる存在となった。ゲリラ戦の状況の中に、自力では何もどうすることもできないという無力感が暴力行為につながり、そしてそのことはさらに怒りや不安感を生むことになったと考えられる。それだけでなく、動機がしっかりし高い士気を保ちやすいゲリラに対して、アメリカ軍兵士は困難な状況に置かれていた。前線がはっきりしない状況では、住民のうち誰がゲリラなのかもわからず村人全員が敵かもしれないという疑いから、無差別な暴力の行使に陥りやすい<sup>(21)</sup>。ベトナムの戦場は、アメリカ軍兵士としてのユニークな役割を果たせるようなところではなく、まさに地獄にほかならなかった。それにベトナムの自然は、アメリカ人にまったく敵対的であるように思われた。解放戦線のゲリラたちは自然と一体化し、ジャングルからの狙撃はまるで木々がアメリカ軍兵士に対して発砲したように感じられたという<sup>(22)</sup>。その恐ろしい南ベトナムの自然の中で戦っていた Bruce が、唯一美しい自然を描いたのは次の日記である。

「さわやかで静かな朝。森に響く鳥の鳴き声。地面に浮いてる薄い霧。溶けてる雲の中から太陽……新しい一日と新しい試練だ。このわずかな時だけ、自分は自然の中で自由に考えることができるけど、孤独も感じる。このわずかな時は自分のすべての時間だ。残りの一日は上官たちのもの。」(1968年4月8日)

このような自然描写は日記の中で一回だけ出てきて、この日以前もこの日以降も現れることはなかった。さわやかな朝、鳥の鳴き声、霧、太陽……彼に何か希望の光が見えたように思われるが、結局また「新しい試練」とともに危険がたくさん待っている一日の始まりにすぎなかった。それに対する不安感

と自分に対する孤独感を美しい自然の前でさえ隠しきれなかった彼の姿が切なく思える。7ヶ月以上ベトナムで戦ったBruceが、美しい自然を目にしたのはこの一回しかなかったのか。それとも、激しい戦争によって彼が元々持っていた普通の人間の自然に対する感覚は奪われたのか。後者であれば、これはまた、戦争の残酷な現実がもたらした戦場における兵士の存在を私たちにもう一度考えさせることになると思う。そして、記述の最後に書いてある「残りの一日は上官たちのもの」とはどういう意味であったのかを、次章の中で考えてみたい。

### 第3章 軍隊と政府と兵士自身

1971年10月、ベトナムとカンボジアの国境に近いアメリカ軍の砲兵陣地で事件が起きた。第12騎兵連隊の第1大隊に属するブラボー中隊の隊長であったクローニン中尉は、この陣地の指揮官から解放戦線に待ち伏せ攻撃の命令を受け、第3小隊に出動を命じた。しかし出動時間が過ぎても小隊の兵隊たちはまったく動かず、その中の一人の発言をきっかけに、ついに兵隊15人全員が命令を拒否した。中隊長に警告されたが、「軍法会議にかけられても生きているほうがまだ」と彼らは答えたという<sup>(23)</sup>。このような事件はアメリカの軍隊自体が内部から崩壊していたことを意味するという考えから、本章では軍隊の中の兵士に注目したい。前章で述べた厳しい戦争状況と自然環境の中で苦しんでいたアメリカ軍兵士は、いったい軍隊の中ではどのような存在であったのか。上官との関係はどのようなものであったのか。また、アメリカ政府に対してどう思っていたのか。自分自身に対してどう意識していたのか。以上に基づいて、彼らの精神状態をもっと詳しく見ていきたいと思う。

#### 第1節 軍隊の中の兵士

兵士が軍隊を構成する顔のないユニットとして扱われ、個人として尊重されることはないとし川ひろみ氏は指摘した<sup>(24)</sup>。こういうことはつまり、軍隊が大きな戦争の機械であると考えれば、その中にいるひとりの兵士がその機械の小さな部品であるにすぎないということだろう。1968年2月25日の日記に、Bruceも「ここ(軍隊)では個人の存在が認められない」と書いた。

軍隊にいる以上、軍全体の活動を行わなければならないので兵士個人の行動はある範囲内に限られていて、自由にできないのであった。もちろん、軍隊には軍規といったルールがある。上官の命令に従うこともその一つで、軍隊に対する兵士の義務でもあった。しかし、兵士は命令に従うことによって、犯罪者になり得るということを忘れてはならない。上官の命令であったとしても、その命令は明らかに非人道的であったり違法であったりする場合、残虐行為などを実際に遂行した個人である兵士の責任が厳しく問われる<sup>(25)</sup>。ベトナム戦争の中でも特に、前章で挙げた「ソンミ村虐殺事件」を含むアメリカ軍兵士による無差別虐殺行為が強く批判された。Bruceの日記にも類似した話について記述されている。一人のアメリカ軍兵士は現地の老人に身分証明書を求め、老人はそれを取り出すのが遅かったため撃たれた。兵士はタバコに火をつけ、死体の頭の穴に挿した。田んぼに走っている女性と子供を見た数人の兵士は全員を撃ち殺した。また、夜のパトロール中に、子供を抱いている女性を脅しレイプした後、母子二人とも射殺し、解放戦線を殺したと報告したなどといったことが1968年4月6日の日記に書

かれていた。すべては Bruce 自身が目撃したことや仲間から聞いた話であった。その 2 日前の日記には、「この頃、やつらが夢中になってるのは殺人記録をつくることだ。おれの中隊は 45 人のベトコンを殺した。他の中隊が記録更新のため、誰でも殺す……」とあった。

それだけでなく、死者の数は勝利を計る基準として悪用され、しかもその数が水増しされていたこともあった。兵士は、死者をすべて解放戦線に数えるようにいつも言われていたことから、さらに無意味な殺人が続く動機になったという<sup>(26)</sup>。何の意味もなく人を殺すことが軍隊の単なるゲームにすぎず、そして戦場の勝利の基準にもなっていた。しかしそのような軍隊の中にいる兵士の立場から見ると、組織の中にいる個人の問題が出てくる。軍隊の任務を遂行する際の暴力行使の結果、兵士は加害者の立場に置かれる。命令によって強制された場合にも自ら命令に従って行った場合にも、加害者という事実は兵士を苦しめることがあると市川ひろみ氏に指摘されている<sup>(27)</sup>。

つまり、兵士は軍隊の中では個人としての存在が認められず尊重されることがなかったにもかかわらず、法律や人道的に違反する命令に従う場合は独立した個人としての責任が追及される存在であった。それに軍隊の中にいる以上、軍隊の任務遂行により加害者としての苦しみを担う存在でもあった。兵士は人間であるからこそ、加害者の立場にいる苦しみと自分の頭に残った加害の記憶は長い年月が過ぎても消えることなく、彼らのその後の人生をだめにするということも例外ではない。1990 年のアメリカ連邦議会決議で実施した 1,632 人のベトナム帰還兵を対象とする調査によれば、PTSD(心的外傷後ストレス障害)と診断された人の中で 75%はアルコールの乱用や依存、17%はうつ病、16%は不安障害が見られたという<sup>(28)</sup>。

## 第 2 節 兵士対上官

上官は軍隊の代表として指導し、直接に戦闘で戦う必要のない立場にあった。一方、兵士は軍隊の一部としてその指導を直接に受け、直接に戦闘で戦う立場であった。日記にはこの上下関係について最も多く書かれていた。上官たちの命令や行動に対して、Bruce は常に批判的な目を持ち、良い評価を一つも与えていないというところに注目したい。

上官からは意味のない命令が下された。例えば、1967 年 12 月 6 日の日記からであるが、少佐が「敵の負けた中隊を絶対見つけろ！」と命令する。Bruce は「どうやって見つけますか？」と聞き返す。そうすると、「自分たちが撃たれるまで待てばいいんだ！」という答えが返ってくる。前章で述べたように、ゲリラ戦の中で姿の見えない敵との戦いはアメリカ人兵士にとって極めて困難であり危険な状況であった。それなのに、少佐が自分の出した命令に対して、そして兵士の命に対してあんまりにも無責任であったことをこの日の記述から読み取れる。Bruce と仲間たちは仕方なく歩き続けていたが、自分が知らないうちに撃たれ、殺される危険に遭遇する不安感と恐怖心を抱えながら、任務に対する責任感というものが削がれていったのだろう。しかし、このような話は一度だけではなかった。1967 年 12 月 16 日、Bruce のパトロール隊は基地まで 1000 メートルの地点に帰ってきたところで、少佐からまた 10 日前と同じ命令が出された。「戻ってあの負けた中隊を捜せ！」という命令であった。しかし兵士たちの間では、その「負けた中隊」はこの 8 年間ずっと捜し続けても見つからず、今 2 つの小隊と 2 丁の銃しか残っていないという噂が流れていた。何の手掛かりもなくただ捜させられた。Bruce は頭に来た。いったい何のため

に「負けた中隊」を捜すのか。存在自体がはっきりしていないものをなぜ捜す必要があるのかと彼は叫んでいた。

「パトロールって本当つまんない。山に登って、ジャングルを歩いて、泥水に入って、穴に入って……くそ、おれは軍隊の中の無数の穴を知ってたぜ。」(1967年12月18日)

次々と下さる意味のわからない命令をつまらなく感じたことから、兵士はアメリカ軍の重要な作戦の一つでもある捜索・破壊のパトロール任務自体が嫌いになった。Bruce 自身がいつもパトロール中、入ったりしていた目に見える穴は軍隊の内部に存在する欠陥(穴)と同じであった。穴に入れば他のものも見えてくる。軍隊もたいして変わらないものだろうと彼は言っていた。軍隊の無数の穴は目に見えないが、軍隊の代表である上官の指導、命令、行動、態度などといった形で表れる。軍隊の中にいる兵士であるからこそ、このように軍隊の落とし穴となる軍隊の実体を知ることができた。

1967年12月27日から29日の3日間、Bruce たちは解放戦線に包囲され、脱出できなかった。じめじめして寒く、狙撃と地雷で仲間の一人が死亡し、数人が負傷した。そこで、ヘリコプターに乗って見に来た少佐は「残念ながら天気が最悪なので君たちを乗せて帰ることはできない」と言い、新しい任務を残してそのまま帰った。「温かいコーヒーとケーキが待ってるからだ」と Bruce はため息をついた。ここでは、敵に囲まれ寒い中で戦い続けてもまだ脱出できないという困難な状況に置かれている兵士たちの姿が描かれている。しかし、その兵士たちに対して天候の都合を理由にし、何の助けもせずさらに任務を追加して背中を向けた少佐の姿の方が特に目立った。自分の部下の命よりもケーキとコーヒーがまだ温かいうちに食べることを大事とした上官の正体は、すでに Bruce にもその場の兵士たちにも見抜けたのだろう。このように自分のことしか考えていなかった上官たちは日記の中で次々と登場するが、兵士と上官の関係という軍隊の一つの実体を物語っている。

1968年1月7日の日記に「中隊の士官」<sup>(29)</sup> Taylor という人物が出てくる。この人はいつも命令口調でしゃべり、そしてトップの将校たちと同じく自分の意見が一番正しいと勝手に思っているという特徴があった。一言で言うと、「えらい自己中の野郎だ」と Bruce は書いている。1968年1月10日、Bruce のパトロール隊はある民家に解放戦線の捜索に入ったとき、容疑者も見つからないうちに家主のおばさんが突然倒れた。彼女は意識不明で死にそうになり、家族の人が号泣した。その状況を前にし、Bruce たちは急きょ無線で救急ヘリコプターを要求したが、「それはおれらの仕事じゃない！余ってるガソリンがない！」と大佐に怒られたという。命に危険な状態の民間人を助けたいという兵士の気持ちに対して、この大佐のとった行動は冷たい態度であった。一人の人間の命の重さがわかっていなかった。上官の対応の仕方により兵士たちは、本当に自分たちの任務がここにベトナム人を救いに来ているのか、自分たちの役割がここで民間人を守っているのかと疑うようになった。「おれらの仕事じゃない」のであれば、いったいこの地で何をしているのだろうと思わせるに十分であった。理由と目的のはっきりしない戦争がもたした結果である考えられる。それに、本来であれば、人が死にそうになっているところを見た人はまず救命を行うのは普通で、当然で、人間的な行為であることは言うまでもない。しかし、戦争のときは普通で当然のことが考えられず、人間も人間でなくなった。この記述は、戦争の現場における人間のあり方、そして戦争の残酷さを訴えるものでもあると思う。

1968年1月12日、Bruce の中隊の兵士一人が民間人を撃った後、彼自身は悲しんでいた。しかし

「中隊の士官」から、誰かを殺したら、その後その人の身分証明書を焼き死体のポケットに手榴弾を入れるように言われたという。ヘリコプターが死体を運んでいくとき、小隊長は「身分証明書を持っていなかった逃走者」と書いてある紙を死体につけたことを Bruce に目撃された。「もうこんな最低なやつらと一緒にいたくない」と彼は叫んでいた。人殺しという自分のやった行為に自覚を持って悩んでいた兵士に対して、その行為を正当化するため、兵士の気持ちも考えずに「中隊の士官」の出した指導発言も小隊長のとった行動も最低な手段であった。その殺人行為はあくまで相手の攻撃から自分を守る自己防衛のために行ったことであるように見せかけた。一方、人間である兵士は他の人間を殺すことができるように軍隊で訓練されたがその後の心の整理の仕方までは教えられなかった。自分の行為を兵士自身がどう受け止めればいいのか、またその悩む部下に対して上官はどのように接すればいいのか、ということはこれまでまったく議論されてこなかったという<sup>(30)</sup>。

マイラ・マクファーソン氏は『ロング・タイム・パッシング—ベトナムを越えて生きる人々—』の中にアメリカ軍帰還兵トム・インタビューを掲載しているが、その語りから、目にした光景の悲惨さが伝わる。トムの記憶から消えない光景は、人間ではなく死体に対する「残虐行為」であったという。戦闘の終わった戦場に 3 機のヘリコプターから降りてきた大佐や少佐たちは土産にするため、死体から所有品の時計などははずし始めた。それだけでなく、その一人の少佐は指輪が取りたいからと言い、兵士に死体の指を切り落とすように命じた。この信じられないくらい最高位の将校たちによる「戦利品集め」行為を目撃したトムはショックを受け、これが自分の目で見た最もひどい残虐行為であると訴えた<sup>(31)</sup>。兵士たちは戦闘で疲れきっていたにもかかわらず、周りの上官に命令され、非人間的な行為をさせられていた。公然に行われた上官の行動はその場にいる兵士たちに衝撃を与え、驚きと不満をもたらしたのであった。

1968 年 2 月 29 日、Bruce の中隊に新しい大尉と中尉（中隊長）が来た。二人とも基本訓練の戦術が大好きな「大のくそ野郎」と彼は呼んでいた。「なぜあれこれをやらせてるか、などと聞くな！ やらないと死ぬぞ！」と大尉に脅されたことも書かれていた。この記述から、任務の遂行する理由を聞く権利などが兵士にはなかったと考えられる。従ってやるのか、それとも死ぬのかという二択しかなかったのだろう。従わなければ敵によって殺されなくても軍規に違反した者とされ、自分の上官によって殺される可能性に直面する。兵士と上官の間にこのような深い亀裂ができたことは、軍隊の中の兵士による反乱行為を引き起こすこととなった。Bruce の中隊では、敵でなく軍隊に反抗するとか考えていない兵士同士がけんかするほど士気は低下したという（1968 年 3 月 1 日）。さらに、自分がやられる前、そして自分がやられないために、自分からやらなければならないと考える者もいた。兵士たちの中からは上官殺しの動きも出て、前線で指揮官の出撃命令に対して銃弾や手榴弾で答えたという<sup>(32)</sup>。このように、部下の兵士による上官の故意的殺害もあったが、それほどアメリカ軍隊全体の士気は低下していた。未遂も含む上官殺し事件は少なくとも 1,013 件が報告されたほか、1967 年に 126 件、1970 年に 271 件、1971 年に 400 件を超えた<sup>(33)</sup>。

大尉は間違いなく狂った殺人鬼であると Bruce は書いた。Bruce たちが誰か一人を殺せば彼は喜ぶという（1968 年 3 月 6 日）。しかし、彼は自らこの「汚いこと」をやらず、安全な場所で寝て 5 人ずつのパトロール隊を派遣し、たくさんの人を殺せるように祈っただけであった。大尉は自分の誇りとなる殺

人行為に興味を持っていたにもかかわらず自分でせずに兵士たちにさせた。ここでは軍規があったとしても、上官と兵士の上下関係があったとしても、上官とは他人に人を殺すことをさせる人であると考え、これは人間として最低の行為だろう。この行為はそういった意味で、直接に人を殺す行為よりも残酷な行為であると思う。戦争の状況に置かれていた戦場の兵士であっても戦車などの物と違って、人格を持っている一人の人間であることを忘れてはならない。市川ひろみ氏によると、兵士は他の人間を殺せる人間になれたとしても、それで殺人による精神的な重荷がなくなるわけではない<sup>(34)</sup>。このように、軍隊の上官は兵士を指導する立場でありながら兵士の精神状態を悪化させる存在でもあったと考えられる。

1968年3月16日、前の週から続いていた戦闘の中にBruceたちはいた。このようなときに限って大尉も中尉もいず、兵士たちは叱られない。しかし全部が終わると同時に、その二人はすぐに姿を現し、「位置につけ！鉄帽をかぶれ！穴に入れ！どれくらい弾を持った？足りない！今度気をつけろ！…離れろ！コラー！…」と命令形の言葉を連発したという。兵士は上官に脅され、圧迫され、身体にも精神にもストレスを受ける存在であった。唯一上官から解放される時は戦闘のときだけであった。なぜなら上官たちはみんな安全な場所に隠れていて前線にはいなかったからである。しかし、兵士は戦闘で戦いの衝撃などでまた身体にも精神にも被害を受ける存在となることは言うまでもなく明らかなことである。兵士は戦闘のときに限らず一日中、軍隊の生活の中で上官による精神的な被害を受けていることがあったと日記から読み取れる。前章の最後に紹介した日記の「残りの一日は上官たちのもの」という記述の意味もここで明らかになる。

「今日の夜、会ったとき、大尉は握手しに来て、人殺しを好む変人の笑みとその目でおれを見る。—すばらしいことをやったって聞いた！オレの自慢の部下だ！「シルバースター」<sup>(35)</sup>を申し込んであげようか？どう思う？—できれば、もう1つの「パープルハート」に換えてもらえませんか？」(1968年3月27日)

Bruceは軍隊の顔でもある自分の上官たちのことを、「野郎」とか「あいつら」などと呼んでいて、憎んでいた。なぜなら、その上官たちのせいで自分たちがひどい目に何回も遭ったからである。その上官たちの「恥知らず」で「非人間的な」行動を何回も目撃したからである。銀星勲章ではなく名誉負傷勲章の数を数えながら早くこの軍隊から出たい、この上官たちから離れたたいというBruceの気持ちははっきりと表現され、軍隊の中の実体を日記に訴えていた。

### 第3節 兵士対政府

上官は兵士の上にいる指導者で直接に戦わない存在であった。さらにその上官の一番上にいるのは、戦争指導者であるアメリカ政府であった。兵士に出された上官の重要な命令もすべて政府によるものであるため、兵士は政府から間接的に指導を受ける立場にいた。上官は直接に戦わなくても戦場にはいた。政府は直接に戦いもしなければ戦場にもいなかった。戦場において直接に戦ったのは兵士だけであった。兵士と上官の上下関係はあくまでも「個人対個人」の関係である。しかし、兵士と政府の上下関係となると、これは「個人対国家」の関係として成立する。ベトナム戦争を起こしたのはアメリカという国家の政府であったが、実際にベトナム戦場で戦ったのはアメリカ人という個人の兵士であった。

1968年2月19日、「血に染まった戦場」でBruceは自分のことを「孤独な心を持つ目的のない愛国者を演じてるバカ者」と書いた。前年の10月に来てからこの日までの4ヶ月間、彼はまだ孤独と戦いながら目的のない戦争を戦い続けていた。これで愛国者になれたのか。そもそも愛国とは何か。この戦争を戦うことで自分の愛国心を示すことができると言えるのか。そもそもこの戦争は何か。この戦争は何のために、誰のためにあるのか。この戦争は自分の友人や家族に幸せを与えるものなのか。Bruceの気持ちは複雑であった。彼自身はベトナムという国もベトナム人という民族も嫌いではなかった。しかしその国で戦っていて、その民族を傷つけているのがベトナム戦争の現実であった。このような現実をつくり出したのは戦争指導者であるアメリカ政府にほかならなかった。戦争と平和という矛盾する概念を持つものにもかかわらずこれらのことを同時に行い、「平和の手を振りながら戦争を起し」、さらに「他人を使って自分の身代わりに戦わせるやつがいる」と彼は訴えていた。それに、そういうやつが嫌いであることも彼ははっきりと述べていた。

アメリカ軍兵士はベトナム戦争に関して自分たちが宣伝されたことと違った現状に直面したとき、あいまいな認識を持ったことから精神状態の悪化へとつながったことを第1章の第2節で述べた。そうではなかった者や戦争を理解できた者はアメリカ政府に対して、不信感を抱き始めていた。アメリカ軍帰還兵ラリーの話によると、ベトナム戦争中ある地域の基地を奪い取るのに彼の仲間が命を落とした。それなのに、軍はその後そこを放棄したという。まさに勝つつもりのない消耗だけの戦争であった。政府にとって、兵士の命はその程度のものであったことを彼はわかっていた<sup>(36)</sup>。軍隊のやり方、そして政府の政策が兵士から見ても、第1章の第2節で例を挙げた「その町を救うためにそれを破壊する」という発言のように矛盾だらけのことであった。このようなことの連続は、ベトナム戦争自体が矛盾だらけの戦争であるということの意味していたのだろう。犠牲を出し、手に入れたものを結局捨てるのであれば何のために奪い取ったのかという疑問が生まれ、ますます政府に対する兵士の不信感が強まる一方となったと考えられる。

また、アメリカ軍兵士が、ベトナムで従軍期間の一年間の間に政府に命令された任務を果たすだけで、物事を深く考える必要がないなどと教育されたことをBruceは思い出した。「責任を全部政府に任せればいい」と言われていたのである(1968年2月20日)。しかし、ホワイトハウスの中において、政策を出した戦争指導者たちは兵士でもなければ手に銃を持って直接殺したり破壊したりもしない。戦場にいる兵士の顔さえ見えていないのに兵士の気持ちを理解できるわけがないとBruceは訴えた。一方、元アメリカ軍脱走兵ヒューは、自分がもしベトナム人であったら解放戦線を支持し、アメリカの介入軍をベトナムから追い出すだろうと述べた。兵士に出された命令が兵士のことを考えながら出されたものではなくアメリカの戦争指導者たちの地位を守るためであったと彼は言っていた。それに、彼と同じ考えを持っていた兵士はたくさんいたという<sup>(37)</sup>。結局、政府の権力者たちも軍隊の上官たちと変わりなく、自分のことしか考えていなかった。兵士の存在をどうでもいい存在として扱い、他国民のベトナム人のためでもなければ自国民のアメリカ人のためでもなく自分たちだけのための戦争を起したという不信感を兵士は政府に対して抱いた。南ベトナムの人々を共産主義者の支配から救うことは兵士たちの義務であるというアメリカ大統領たちの発言は「まったくの大うそであった」と元アメリカ陸軍衛生兵キース・フランクリン氏は叫び、これには南ベトナムにいる何万人の兵士から賛同が得られると思った<sup>(38)</sup>。



Bruce は、なぜ自分が普通の会社員にならなかったのかと軍隊に入ったことを後悔し、なぜこのまま我慢しているのか、なぜ銃を捨てないのかと兵士である自分に悩み、迷ったということが 1968 年 2 月 6 日の日記でわかる。しかし、戦争の真ただ中で状況がもっと悪化するだろうと彼は判断し、軍隊に残ることにした。彼自身による選択でもあるわけだが、その結果、彼がベトナム戦場で戦死したアメリカ軍兵士約 6 万分の 1 となることは残念なことである。

「我が国は圧倒的な力を持って、神様の名の下で、平和のために、自由のために戦ってる。でも、おれにとっては、すべてが恥だ。」(1968 年 4 月 6 日)

このように、国のために戦う勇気を失い、軟弱に流れ、自分の国を恥じているアメリカ人兵士を徴兵拒否者や脱走兵と同じであるとニクソン大統領は非難した<sup>(39)</sup>。しかし兵士たちは政府にだまされ、裏切られたと感じ始めたところから戦う勇気を失っていったとも考えられる。それに、この戦争は「国のため」という高尚な目的以上に一部の権力者たちのためでもあったことを忘れてはならない。Bruce は自分の国アメリカを恥じたが、徴兵拒否もしなければ脱走もしなかった。しかしその彼の中にも、軍隊に対する不満、そして政府に対する不信感があったことは彼の日記から読み取れる。

#### 第 4 節 兵士の自己意識

1967 年 10 月 23 日、アメリカ海軍の空母イントレピッド号から 4 人の水兵が脱走した。その後 11 月 11 日、小田実氏や鶴見俊輔氏らの援助で 4 人は東京で記者会見を開いた。アンダーソン氏は、平和のために個人としての行動を起こさなければならないと訴えた。バリラ氏は、自分が反米主義者でも共産主義者でもなくただ正しいことをしただけであると主張した。ベイリー氏は、人殺しが非人道的な行為で自分自身に対する罪であると述べ、そしてリンドナー氏は、軍事的虐殺の支持に対して拒否すると強調した<sup>(40)</sup>。

このように、脱走という同じ選択をした兵士たちは声明を発表したことによって、彼ら一人ひとりの自己意識が見える。それぞれの理由が挙げられたが、そのどれも一人の個人、そして一人のアメリカ人の立場からの自己主張であった。兵士である彼らには、軍隊と政府の命令に従うことが義務づけられていた。しかし、その命令が自分の良心と逆行した場合、どちらかを選択しなければならないと彼らは悩んでいた。混乱した精神状態の中で兵士の自己意識が働きかけてきたと考えられる。アメリカの戦争指導者たちの偽りとベトナム戦争の本質を見抜いた彼らは自分の良心を選択したのであった。それに、軍隊や政府の命令に従わないということは自分が罰を受けるに違いないということも彼らは覚悟した。罰があることを知ったうえ、脱走兵たちは自分の気分や気持ちや良心を大切にする方を選んだのである<sup>(41)</sup>。1967 年から 1971 年末までの 4 年間で、アメリカ軍の脱走兵は 35 万人を超え、1971 年だけでも 10 万人に達した。また、陸軍で 1 ヶ月以内の無断欠勤した数は 1 年間で陸軍総兵力の 6 分の 1 に当たる 22 万人にも達したという<sup>(42)</sup>。

「この場所も戦闘も軍隊も政府もすべて飽きた。英雄？英雄って何だ？勲章をもらっても良心がきれいになれないんだ！」(1968 年 2 月 15 日)

Bruce はこのように日記に書いた。自分の良心がきれいであれば、英雄だろうが勲章だろうが自分にとって何の意味もないと考えていた。このような意識を持ったことで、彼の心はもう兵士ではなくな

っていた。戦場、戦闘、軍隊、政府を嫌ったところか、英雄としての名誉も勲章もどうでもいいものとなった。こうやって軍隊も国家も、脱走兵(deserter)によって捨てられた(deserted)のである<sup>(43)</sup>。兵士たちの間では脱走以外にも自分たちの意思や気分を反対行為で表した。1967年から、上官の理不尽な命令に従わず、軍規に違反し、軍隊や政府に反対する行動は目立ってきた。兵士でありながら労働者でもあるということから「アメリカ兵士組合」がつくれ、戦争反対に加え、労働者の権利や軍隊の民主化を要求した。また、数人から数百人の兵士たちは集まり「反戦 GI 新聞」を出した。数十種類もあったが、どれも兵士の肉声で軍隊・戦争・人種差別への反対を訴えていた。どれも国家という「公」に対する個人という「私」の主張であった<sup>(44)</sup>。

これらの反対行動は、アメリカ人兵士の軍隊に対する不満、政府に対する不信感、自分自身に対する自己意識を表すものであったと考えられる。軍隊では兵士一人ひとりが守られない、そして兵士を負傷させても、死亡させても政府が裁かれることはない<sup>(45)</sup>。脱走をした者にしても反対行動を起こした者にしても、みんなベトナム戦場で戦うこと自体に対する士気や勇気はもう残っていなかった。なぜなら、自分たちの存在を尊重しないもののために戦いたくないからであった。自分たちの生命を軽視したもののために犠牲になりたくないからであった。そして、自分たちの良心を汚すようなことをやりたくないからであった。このように、アメリカ人兵士は軍隊と向き合い、アメリカ政府と向き合い、最後に自分とも向き合っていた。こういったことは彼らの精神状態に影響を与え、彼らの行動につながったのである。

## 終章

「休暇<sup>(46)</sup>が近づくとわくわくする。ここにまだ残ってる友達に悪いて思うけど、行くよ。」(1968年5月8日)

これは、日記の最後の記述である。6ヶ月間、さまざまな出来事を経験してきた Bruce はやっと一週間の休暇がもらえることになった。手に銃を持っていたアメリカ陸軍の兵士であっても彼はまだ20歳の青年であったことを忘れてはならない。ずっと待っていた休暇が近づくとつれ、あふれてくるわくわく感も、そして友人を残して自分だけが休みを取るのは気が引けるという複雑な気持ちも20代の私にわかるような気がする。それに、この休暇は、ベトナムにおける義務期間の半分が過ぎたことで、兵士が無事であればあと半年で帰国できるということも意味していた。しかし、この休暇が終わった後、Bruce はまた南ベトナム戦場に戻って戦い、そして1968年5月31日に攻撃の中で命を落としたのであった。Bruce が永遠に帰らぬ人となった日から40年近くが経とうとしている。にもかかわらず、彼の日記を読むたびに、当時その日に起きた出来事がはっきりと見え、登場した人物の表情もはっきりと見え、そして彼自身の考え、思い、怒りといったものも鮮明に伝わってくる。日記を読むことによって、実際に戦地で戦争を体験した兵士の声がどれほど重みのあるもの、説得力のあるものであるかを改めて感じることができた。

ベトナムで戦ったアメリカ人兵士は、Bruce のような人生を送った者もいればそうでなかった者もいるのだろう。しかし、彼らには共通点があったと考えられる。ベトナムという自分の故郷から地球半周も離れた見ず知らずの国に送られ、その国の人々を共産主義者の支配から救う使命を任せられた。しかし、

彼らが参加した戦争は偽りで固められ、意味もはっきりしなければ正義のための戦争でもなかった。兵士たちは、戦争指導者たちにだまされ、利用され、殺人をさせられ、破壊をさせられた存在となった。兵士の多くは自分の存在を疑い、自分の行動と役割を疑い、戦争自体を疑い、不安と疑惑の悪循環の中で苦しんでいた。ベトナム戦争の矛盾に気づき始めた時、上官の命令に反対し、軍隊に不満を持ち、政府に不信感を抱くようになった。自分の良心に反することや人間的に、また人道的に反する行為をしたくないという思いから、脱走や反対行動という彼らの行動につながった。彼らの精神状態には、もはや士気や勇気は存在しなかったのである。

戦争は、国家と国家、組織と組織、兵器と兵器などのぶつかり合いというイメージがある。しかし考えてみると、その国家も組織も兵器も人間によってつくられたものであれば、戦争を起こすのも戦争に参加するのも人間である。本論文では、体を張って戦う戦場の兵士に注目し、考察した。そこに、戦争の現場における人間の姿を見ようと努めた。兵士は戦場で直接に戦っていて、戦争を自分の肌で感じているからこそ、戦争の本当の残酷さを私たちに伝えることができる。それに、個人としての人間の立場から戦争を見ることによって、戦争の勝ち負けという単純な問題よりも、戦争がその中にいる人間にどのような影響をもたらすのかという問題の方がもっと深刻な問題であると思うようになった。戦争の実体、戦争の中の人間、そして組織の中の個人の存在といったものを考えさせられた。

私は 1995 年、中学一年生のとき Bruce の日記を読んだ。871 ページもある大著 *A File on American Culture* の中で、ベトナム語に翻訳されたその日記はたったの 24 ページしか占めていなかった。また彼のことは特に印象に残りはしなかった。学校の歴史の授業でベトナム戦争について学んでも結局最後に「ベトナムが勝って、アメリカが負けた」というようなことしか覚えていなかったが、あれから 10 年以上が経ち、大学でアメリカ研究のゼミに入った。そのとき、もう一度 Bruce の日記を読もうと思った。十分にわかっていなかったベトナム戦争をもう一度調べる必要と、戦場の兵士をもっと研究する必要があると考えたからである。今度は一回目と違って、読めば読むほど、驚きと共感の気持ちがあふれてきた。自分を彼と一体化し、彼の体験を自分の体験のように思い、彼とともに泣いたり、笑ったり、怒ったりした。

「戦争はいつの時代でもどこにおいても、すべてを破壊してしまう残酷なもので、戦争ほど残酷なものはない」と当時アメリカによる北ベトナムへの爆撃(北爆)を体験した母は言っていた。「すべて」には形のあるものも形のないものも含まれている。町、住宅、学校、病院などという形のあるものだけでなく、人間の持っている人間性という形のないものまでも戦争によって消されてしまうからである。歴史の間違いというのはすでに起こったものであり、取り戻せないものである。今の私たちにできることは、その歴史の間違いを繰り返さないように努力することである。世界のこれからが戦争のない平和な時代であるようにと私は願っている。きっと全世界の人々もそう願っていると思う。そこで、いまだにまだ不安定な状況が続いているイラクを見ると、いったいイラク戦争は何の意味があったのかと思わざるを得ない。ベトナムにおけるアメリカの誤りが再びイラクで繰り返されているように思える。ベトナム戦争からの教訓、そして国際社会に対するアメリカの役割がもう一度問われているところである。

## 注

- (1) 「南ベトナム解放民族戦線」とは、1960年に南ベトナムで結成された反アメリカ・反帝国主義の組織。通称はベトコン(ベトナム共産<sup>ベトナム共産</sup>の略)。  
<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%8D%97%E3%83%99%E3%83%88%E3%83%8A%E3%83%A0%E8%A7%A3%E6%94%BE%E6%B0%91%E6%97%8F%E6%88%A6%E7%B7%9A> を参照。
- (2) 2007年10月の増井ゼミでの議論で気付かされた。
- (3) <http://www.virtualwall.org/da/AnelloBF01a.htm> を参照。
- (4) ロバート・S・マクナマラ著、仲晃訳『マクナマラの回顧録—ベトナムの悲劇と教訓—』(共同通信社、1997年)、428ページを参考。
- (5) 清水知久著『ベトナム戦争の時代』(有斐閣、1985年)、40ページ。
- (6) ベトナムにおけるアメリカ軍兵士の従軍期間は1年間と規定されていた。(Huu Ngoc, “Diary of a G.I. Who Fell in the Vietnam War”, *A File on American Culture* (The gioi, 1995), p.756)
- (7) マイラ・マクファーソン著、松尾式之訳『ロング・タイム・パッシング—ベトナムを越えて生きる人々—』(地湧社、1990年)、72ページ。
- (8) マイラ、前掲書、104ページ。
- (9) 亀山旭著『ベトナム戦争』(岩波新書、1972年)、96ページ。
- (10) 亀山、前掲書、37ページ 及び  
<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%BD%E3%83%B3%E3%83%9F%E6%9D%91%E8%99%90%E6%AE%BA%E4%BA%8B%E4%BB%B6> を参照。
- (11) 「パープルハート(purple heart)」とは、名誉負傷章のことで、戦闘によって負傷したアメリカ軍兵士に対して与えられる勲章。  
<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%90%8D%E8%AA%89%E8%B2%A0%E5%82%B7%E7%AB%A0> を参照。軽重を問わず、1回負傷したアメリカ軍兵士は1つがもらえる。2回負傷したら戦闘を免れる。3つがもらえると、ベトナムでの従軍期間が終わっていてもアメリカに帰国できる。(Huu Ngoc, 前掲書, p.763)
- (12) 亀山、前掲書、110ページ。
- (13) マイラ、前掲書、78ページ。
- (14) マイラ、前掲書、18ページ。
- (15) 市川ひろみ著『傷つく兵士—戦場の被害者—』(神戸大学大学院法学研究科、2005年)、7-8ページ。
- (16) マイラ、前掲書、79ページ。
- (17) 市川、前掲書、10-11ページ。
- (18) マイラ、前掲書、78ページ。
- (19) マイラ、前掲書、78ページ。
- (20) マイラ、前掲書、18ページ。

- (21) 市川、前掲書、10 ページ。
- (22) 吉田元夫著『歴史としてのベトナム戦争』(大月書店、1991 年)、151-152 ページ。
- (23) 亀山、前掲書、109 ページ。
- (24) 市川、前掲書、2 ページ。
- (25) 市川、前掲書、3 ページ。
- (26) マイラ、前掲書、84 ページ。
- (27) 市川、前掲書、4 ページ。
- (28) 市川、前掲書、11 ページ を参考。
- (29) アメリカ軍の中隊ごとに中隊長(中尉)がいた。そして、中隊長の命令遂行を監督するために「中隊の士官」がいた。彼らは一般に職業軍人であった。(Huu Ngoc, 前掲書, p.750)
- (30) 市川、前掲書、4 ページ。
- (31) マイラ、前掲書、31-32 ページ。
- (32) 清水、前掲書、97 ページ。
- (33) 市川、前掲書、10 ページ 及び 亀山、前掲書、111 ページ を参考。
- (34) 市川、前掲書、4 ページ。
- (35) 「シルバースター(silver star)」とは、戦闘で解放戦線やゲリラを殺した功績でアメリカ軍兵士がもらえる勲章。  
<http://www.yorozubp.com/0402/040221.htm> を参照。
- (36) マイラ、前掲書、83-84 ページ。
- (37) マイラ、前掲書、237-238 ページ。
- (38) 清水、前掲書、55 ページ。
- (39) 清水、前掲書、91 ページ。
- (40) 清水、前掲書、92-94 ページ。
- (41) 清水、前掲書、92 ページ。
- (42) 亀山、前掲書、110 ページ を参考。
- (43) 清水、前掲書、95 ページ。
- (44) 清水、前掲書、95-97 ページ。
- (45) 市川、前掲書、14-15 ページ。
- (46) ベトナムで6ヶ月間従軍した後、アメリカ軍兵士は外国(タイ、日本、ハワイなど)で1週間の休暇がもられた。(Huu Ngoc, 前掲書, p.768)